

子の死 悲しみ癒やす

6/27読花(女)(7)

親の手記 冊子に 九大准教授ら

病気や事故で子どもを亡くした家族の悲しみや不安に寄り添い、心身の回復を支援するグリーフケアのための冊子を九州大の准教授らが作成した。実際に死と向き合った親らの手記をまとめたもので、タイトルは「空にかかるはしご」。天使になった子どもと生きるグリーフサポートブック。執筆に携わった人たちも「同じ悲しみを抱く人たちに『ひとりじゃない』と伝えられたら」と願う。

(手嶋由梨)

「先に子どもがいなくなるなんて、私がこの世を生きる意味があるのかな……無我夢中で、生きること、死ぬことを模索してきた」

4年前、長女の七奈子ちゃんを3歳で亡くした主婦の市川朋美さん(43)(福岡市博多区)は、当時の思いをそう記した。

3歳の誕生日に脳腫瘍が見つかり、10か月後、ひとり娘は旅立った。それから市川さんは「ゴールのないマラソンのような、終わりのない悲しみ」と闘い続けた。

気持ちに変化をもたらしたのは、時間の経過と、同じ経験をした人との交流。思いを吐露し、少しずつ「穏やかな悲しみ」に変えることができた。「同じよう

に苦しむご家族の力になれば」。市川さんはそんな思いで、執筆を引き受けた。冊子は九州大の浜田裕子准教授(小児看護学)が企

グリーフケア 震災契機に注目

「グリーフケア」のグリーフ(grief)は「悲嘆」の意味で、「悲しみのケア」とも言われる。大切な家族や友人を亡くし、喪失感や不安、混乱、怒り、孤独などの複雑な感情や身体的な不調に苦しむ人に寄り添い、社会に適應できるように援助する取り組みだ。

グリーフケアが大きく注目されたきっかけは、2011年3月に発生した東日本大震災。医療・福祉関係者らが被災地へ赴き、家族を亡くした人の話を聞いたり、気持ちを共有したりして悲しみを和らげる支援が行われている。

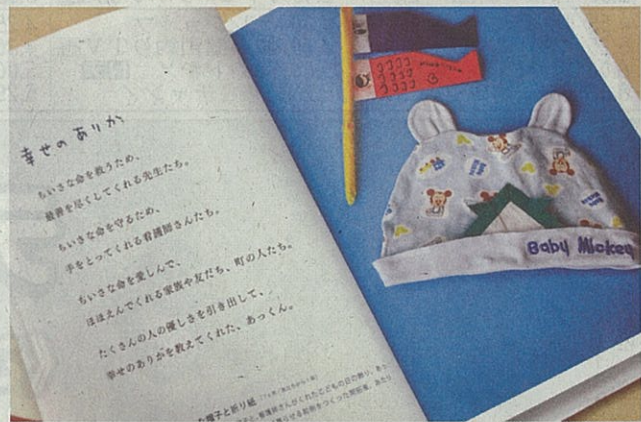
「子を持つ全ての親に読んでほしい」と願う声もある。6歳の時に交通事故で亡くなった三男の皓介君への思いをつづった蓬田純子さん(49)(同市早良区)は、「子どもが元気だという、かけがえのない日々大切さを再確認してもらえ

ら」と話す。作成した冊子約1200部は、同じ境遇の希望者らに配布。まだわずかに残っており、子どもを亡くした家族を対象に10冊を贈呈する。また、増刷を求める声があったことから、8月には九州大学出版会から内容を一部増やして有料出版される予定。問い合わせは、同出版会(092・8333・9150)へ。

「ひとりじゃないと伝えたい」



①冊子を手に「子を亡くした悲しみを抱える人に寄り添いたい」と話す浜田准教授
②子どもたちが身に着けていた思い出の品物の写真や、メッセージなどが掲載されている



画。小児がんや先天性異常、交通事故などで0〜12歳の時に亡くなった22人の家族から、思い出の風景や大好きだった物などの写真とともにメッセージを集めた。看護師や保健師として小児科で多くの患者や家族に接してきた浜田准教授は、「病院は『治す』場所で、患者が亡くなったら関係も終わる。家族の悲しみはそこから始まるのに、ケアが十分ではない」と感じ続けてきた。研究の一環で遺族へ聞き取りをした際、「冊子なら自分のペースで向き合える」との意見を聞き、作成を思いついたという。

医療技術の発達や少子化で、「子どもの死」は減少している。厚生労働省の統計によると、15歳未満の子どもの年間死亡数は、1990年には1万602人だったが、2015年は3614人に減った。「子を亡